

信仰は、

キリストの預言職の実践です。

預言者とは、神の言葉を預かりそれを人々に告げる仕事なので、神の言葉（聖書）に根拠を置く必要があります。

ヘブライ書は、

「今日、神の声を聞くなら心をかたくなにしてはならない」という詩編の言葉を引用した後、次のような解釈を加えています。

「というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。」（ヘブライ書4、12）

「更に、神のみ前で隠れた被造物は、一つもなく、すべてのものが、神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません。」（同上4、13）

この神の言葉を受け入れ、自分を変えられてこそ、キリストの預言職を果たせるのではないのでしょうか？
また、この神の言葉の受容が典礼や宣教の基礎となるべきことは言うまでもありません。

典礼は、

同じくヘブライ書からの文章を引用したいと思います。

「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物や、犠牲を捧げるよう人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身の弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることができます。また、その弱さのゆえに民のためだけでなく、自分自身のためにも罪の償いのために供え物を捧げなければなりません。」（ヘブライ書5、1～3）

キリストの司祭職に召されている私たちは大祭司キリストを模倣しなければなりません。

また、神の民は司祭たちが聖なる人であることも願っています。それは、聖なる叙階を受けた人だから、神の祝福をもらいたからです。

このような要望に十分応えられる司祭になっていただきたいと思っています。

宣教は、

善き牧者であるキリストをまねることです。

「私は良い羊飼いである良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（ヨハネ10、11）ご存じのように、イエスのこのお話は、エゼキエル34章に描かれている、イスラエルの牧者の姿とまるで逆です。

私は福音宣教とは、「愛の実践」のことだと考えています。哲学科生の時に教わった哲学の命題が今でも忘れられません。それは、「人は考えたように行動するのではなく、行動したように考える」というものです。出典は不明ですが。

ところで、牧者は民の統治や、管理の役務を含みます。どうぞ、愛の心をもって、奉仕の精神で、その役務を果たしてほしいと思います。

教会は、

「キリストの肢体」である私たちキリスト信者自身のことであり、「信仰」、「典礼」、「宣教」という、これら3つの柱で構成されている。

60年前、鹿児島教区の司教様や神父様方は、福音宣教のために、教会と幼稚園、それに施設や学校を作りました。建物の維持管理には時代に合った必要な手立てが必要です。

ただ、見える建物と同時にそこに集まる共同体がしっかりしていなければ、つまり、教会共同体が成長していなければ、教会は活性化しないのです。

そのように考えた時、私たちが教会であること、もう少し言うなら、私たちは、何を求めて教会に集まるのか、だれを信じて集まるのか、何をしに教会に集まるのか、教会は社会に対して何をするとところなのかを、みんなで問い合う作業が必要だと思うのです。